

Vocal cord dysfunction 12症例の検討

近畿大学医学部呼吸器・アレルギー内科

富田桂公(とみたかつゆき)、星晋、山藤啓史、西川祐作、内藤映理、山片重良、市橋秀夫、佐野安希子、池田容子、佐藤隆司、佐野博幸、宮良高維、岩永賢司、村木正人、東田有智

【背景】Vocal cord dysfunction(以下、VCD)とは、発作性に喉頭部(頸部)の喘鳴や呼吸困難を呈する声帯の機能異常である。

【目的】我々は、これまでVCD患者12症例を経験したので、その臨床的特徴について報告する。

【対象】平均年齢54歳(26-67歳)。男性5例、女性7例。

【結果】発作は昼寝も含めて寝入りばなに出現し、「窒息感」を伴う「吸気時頸部喘鳴」および咳嗽の症状にて発症していた。症状は平均3日間(1日-12日)継続した。12症例中9例(75%)は、喘息患者であった。8症例において、他院にてヒステリー、神経症、喘息発作と診断されていた。治療は、プロトンポンプ阻害剤+去痰剤+吸入ステロイド剤(喘息の場合)の使用により、発作は消失した。また、発作時のスピーチ治療(下唇に上歯をのせて“F”と発声)は有効であった。

【考察】寝入りばなに出現した「窒息感」を伴う「吸気時頸部喘鳴」および咳嗽に対して、VCDを念頭に入れる必要がある。